

万葉と郷土

歌誌 創作同人 押尾克己

万葉集は我が国最古の歌集で、大伴家持の手になつたと伝えられ、集甲の歌は四千五百十六首、全二十巻、仁徳天皇の代より淳仁天皇の代まで作者は貴賤を、男女を問わず、約四百五十年間の和歌を収めてゐる。そのあまたの中からは、約四百首の歌を捜し出す事はおそろしく気骨の折れる事であるけれども、又それ以上の有意義なことを介します。

鳥矢の野に兎狙はり長々も寝なへ兎致に母も嘔げえ

鳥矢の野とは鳥養部の居りし高岡、高崎川下流の鉦木、高崎、この歌はいはゆる東歌で、作者は不明である。上句「鳥矢の野...長々も」は序詞で、意味は、女の哀へ忍んで行った差者が運悪く母親に見えられ叱られたという悪疾の歌で、「寝なへ」は寝ない、「嘔げえ」は叱られたという事で、同時代の風俗を知る上で面白い。

天地の何れの神に祈らばか 美し母に又言交けむ (下総国埴生郡 大伴部蘇守佐)

埴生郡とは、旧八生村、現在は房総風土記の女周辺という。この歌は防人(昔の兵士)の歌で、九州防備にあつた。内容は、天地にたくさんある神祇の何の神祇に祈つたならば、防人としての任務を無事に果して、妻愛の母に再びめぐり逢えるらんうかとの母恋しきの歌で、作者は少年かもしれない。防人の歌にはかかる教神思想の歌は多いが、仏教思想の歌のない事は注目すべき事かも知れない。



沙舟の 軸越そ 白波 俄くも 科賜ほか 思念えなくに (印旛郡 大部 直下歳)

この歌も防人の歌である。当の印旛郡とは、佐倉、本佐倉、二本佐倉、酒々井、中川飯田、菖山周辺という。意味は舟の軸先に立つ白波の濤珠を見てみると、急な命に依り防人に行かねばならぬなうたか歌うたという戸惑いの心を詠んでいる望郷の歌だ。「沙舟」は川船に對する「けな」との意。

以上の歌が何の様な程路を辿り、万葉集編輯部に届いたか、その反面に未収録の歌も相違にあつたはずだと思われ。現在より千四百年も前に当地にも歌人が居たという事は興味ある事である。又同時代より降るが次の歌のある事も書き加える。

伊婆の浦波 たつらしも 舟人ききはき、 から鏡押すなり 古今六帖にある (大江千冬)



押尾克己さんのこと

歌誌創作の社友より、この度印旛郡ではたまたまの同人として活躍中のことは知る人ぞ知る。いつも愛用の麦わら帽子をかぶり、人との出会いを何よりも大切にされる人。新万葉に載りし吾が歌を誦んじて、さう友と居て、歌し、酒の座、お酒がすすり、歌す、目下、播磨にて禁酒との事ながら、信がた事である。楽しんでつては、やうな事にも、又皮肉な、ぶりに、歌にての便りなれば、返歌とすま器量持と合わせず、便話にて長々と生の声を送るのみ、現在酒々井町短歌会が元締、俳句会、朝虹に夏げじと意気高しの日々、月。

郷土研俳句

金鈴杯受賞の句 沖田 禾秀

人声へ夕日飛びつく冬木中 翔ぶものなければ樹氷光り合ふ 姿見に四日の空や髪梳ける 木の葉降る翠列の道掃いておく 暖冬や蜜峰ひそと枇杷の花 三石の大注連新衣に初明り 塵ひとつ余さず掃いて年改る 初層祖母と呼ばれる日の近き 宣伝力一過ぎて何もなぬ枯野 悲しみの中に我あり寒椿 冬の夜や茶椀で米とはかりけり おみくじは大吉とてたり初詣 鯉こくの足りて眼鏡のくもりけり 初日の出輝めす雨の元旦かな 花選び小雨静かに年送る 春の水流れ静かにとまらず 初宵やふみかめらいて立つくす 髪洗いと夫の番草や初鏡

里余子 邑草子 松崎子 春の坡 松崎子 一月松風子 一之助 伊之助 秋香子 今子 茂子 今子

七草かゆ 大盛況

新春のおとそ気分もちよつとさめかかった十四日 青年研修所は何かしらけなやろだ笑。声につつまれてた。オメデトウの言葉交し合ひ、互に親を下げ合ひ、コトシモドウゾロシフと逢う人ごとと同じ文句のくりかえすこと三十数回……

広い台所の中はまるで女子学生の如き 着やいだ声……

セリと洗う人。天牛も用意する人。米をとぐ人。皿を洗う人……前もつて決めていたわけてはないが台所仕事は事々ベテラシキがやることは早い。食べること……となると、すべからず勤作もなめらるか？

会場では男従出席者、ストロブの仕度、七草かゆり、会計係をおしつけられて、領收書と石前とお金が合わないとほやいている押尾氏、石渡氏のあわれい酒々井の若田氏、尾上の綿貫両氏欠席。風邪との由、差し入れの清酒二本に感謝。

尾上の京増忠次郎氏より、七草かゆを作る際に菜とさごみながら唄ったという古歌の紹介。

七草かゆすな、唐工の鳥が、後らぬ先に、なぐな七草、そろえてトニ、日本の土地に

ためしにこの歌、調子をつけてうたいながら菜とさごみでみたが、ソフの間にやら歌の調子は、津軽海、冬景色、時代がちがいの様なもの……と感ぜさせられた。



光孝天皇 厨子を入るの図

文春 2月号より拝借

平安朝の光孝天皇、どのような料理と得意とされたかは不明だが、自分の御座で煮炊きをするので薪の煙が御座にくすぶる「黒戸の宮」とも呼ばれた。その当分の上流階級には、寒中な差菜摘みという、わば風流ピクニックがあり、摘んだ野草を雑炊にして楽しんだ。野に百人一首の君がため春の野にまで差菜摘む、わが衣手に雪は降りつと、という和歌が残っている。

七草かゆを食べる会参加記

大きなおなべに三杯、かゆがふつふつと煮えています。あとは餅と七草を入れるばかり。ちよつとした空白の時、思い出されるのは、さき日のおふくろ様のこと……生まれて初めてつくる七草かゆに気もそぞろ、大きなかまを「ドッコイショ」と、おろされた猫ちゃんにザブリ！うつら……と居ねかりして、猫ちゃんにザブリ！その後どんなことになりまして……？これはしばしば父から聞かされた話だが、私の実家では七草かゆを砂糖で食べる家付娘の母親が、よそから来た人は皆醬油で食べる」と言った。何て考えているら「もちいいぢやない」と金杉さん。「お餅は三箇に……しよう。多分にはかまわれない」と、被女の青年並のいいこと本当においしかった。これは私だけの思いがしらう、おトソで乾杯、酒がまわる程に座は陽気になり、くづれていく。左近さんの創作舞踊、宇佐見さんの本格歌、鈴木さん本場の上手、「外山節」で「たっけ」又聞かせた下さいね、二次会には、かるた取り、昔の若かりし頃の記憶を呼びさましては、一枚又一枚と、札を取る人が集まって来る。押尾さん、石渡さん、古川さん、田村さん、和田さん、細川さん、あまりの盛況に会長氏曰く「来年はかるた取りは別の日にやりましよう」と。七草を食べて今年いいことなるとありそうなの……

（上岩橋、青柳菜子）

短歌

中川 金杉 智恵

崩れ易き餅につくばい、芽なづな、萌えし七草、さかしつつ摘む
真白なる、かゆにまぜたる七草の、みどり香にたあ、吹きふすすする
植物園鑑片手に七草、さがしきて、相寄り炊きし、かゆぞこのかゆ

始末記

私の座にココオニアピラコを見て押尾克己氏の「まわく」のタビラコなんてあやしいもんだ、ニクヤどう見てもタンポポだっペヨ、大丈夫かな、腹痛おこしたらこまっからヨ、オラ食わネ……と言え、様幼女子のダダをこねるが如し。二杯目とたいらげたこと知るは筆者のみ。

七草を求めて早春の一日を歩き回る。酒々井はおろか佐倉まで足をのぼし、佐倉野草の会の力を借りて最後の位の座を見つけ、ほっと一息、これほどの思いを炊きこめた七草かゆをすすり、延命・長寿を祈る儀式の楽しき哉

行事案内

◆ 2月26日(日)

- 午後一時 役場集合
- 雨天の場合は青年座研修所にて研究会
- コース 横町～谷上り～芝山道～大川戸～役場

◆ 3月26日(日)

- 午後一時 国鉄酒々井南口
- 雨天の場合は研修所
- コース 東酒々井～尾上～東国道副～新橋道～七曲

会員外の方参加自由です



野草観察会

お申し込みはお早めに

飯高檀林 飯高檀林

取香牧野馬捕込 芝山仁王尊

高村老太郎詩碑 三里塚水野葉舟歌碑

三里塚水野葉舟歌碑

高村老太郎詩碑

取香牧野馬捕込

芝山仁王尊

はらわ博物鑑

飯高檀林

飯高檀林

コース

午前八時二十分 役場集合

会費 一〇〇〇円(当日)

教育委員会へ電話申込み (九六)

一七七一

第四回 県内史跡見学会 会員募集

A ぼん 三月十四日(火)

B はん 三月十六日(木)

先着順 35名 締切

定時総会 報告

郷土研究会の事業年度は、全則りよつて一月一日から十二月三十一日までとなつております。従つて昭和五十二年度は、十二月末日に終了し、一月二十一日午後一時より、青年研修所において定時総会を開催いたしました。出席者五十名の多数により、増田会長挨拶、末廣として京藤一郎氏を議長に選出、五十二年年度決算書、事業報告書の承認、五十二年年度予算書、事業計画書の承認、議案につき、事務局並びに相承会長の説明、曾根店長の後、原業通り可決されました。議事終了後、懇談会に入り、敬談に移る、懇談会に入り、三十分用会となり、四時に

郷土研俳句

鯉こくの足りて眼鏡の
くもりける はる

外孫に年玉やる
母の顔 光美

大棒 空にそびえて
冬の月 知子

しべ深く冬日を裁し
落椿 一甫

《昭和53年度 事業計画》 決定!

新入会員の御紹介

お申込みは (96) 1171へ

53.2.1現在

- 古文書研究会 新規事業。年間12回 月例により古文書の読解等を勉強する。
- 郷土史講座及び郷土史座談会 前年度は年間5回であったが本年は10回以上実施する(教委共催)
- 野草観察会 月例により所内外の野草の生態観察
- 家紋調査 町内の家紋を調査し今後の資料とする
- 石仏調査 町内にある石仏総点検。新規3年計画
- 史跡見学会 年間4回
- 会報の発行 年間4回以上を目ざし内容のある会報とする
- 史跡めぐり、ハイキング 年2回町内の史跡を見て歩く(教委共催)
- 運営委員会、総会

126	山田乃子
127	田橋幸雄
128	高橋栄子
129	岩崎三郎
130	若田朝次
131	青木内丸
132	青木鶴子
133	青木知子
134	青木光政
135	青木雄子
136	青木江子
137	青木和子
138	青木子子
139	青木子子
140	青木子子
141	青木子子
142	青木子子
143	青木子子
144	青木子子
145	青木子子
146	青木子子
147	青木子子
148	青木子子
149	青木子子
150	青木子子